八木重吉研究

――重吉の詩観

那須　香

一

八木重吉程、自分の詩についての詩を書いた詩人は稀なのではないだろうか。詩人が自分の求める詩を詩とする。この事は何を意味するのだろう。それは、詩と信仰を一つの道とした重吉を《求道的詩人》と言わしめる証しではないだろうか。

重吉は約八十篇程、これに関連する詩を残している。そしてまず注意しなければならないことは、重吉が〈詩〉を〈うた〉と読ませ、〈うたう〉と書くことが非常に多いという事である。この事は、重吉の目指した〈詩〉がどのようなものであるかを現わしている。

重吉は詩論と呼べるようなものはほとんど残していない。「ジョン・キーツ覚書其の他」「断片」として全集に載せられているものがある程度である。「ジョン・キーツ覚書其の他」は、重吉の残したノートから、詩人・英文学者の安藤一郎氏が抽出し、昭和三年十月号『詩神』に発表したもので、原ノートは現在失われている。発表されたものの約五倍の量があったという。「断片」とされたものも原稿の半分が失われたものである。これらに詩論らしきものが書かれていたかもしれないのだが、これは推測の域を出ないだろう。

けれども、重吉がかなり意識的に〈詩とは何か〉ということを考え、詩作していたということは確かである。

重吉の、平易な言葉を用いた詩は、とかく詩という場から除外されがちであり、単なるつぶやきを書き留めたものとして受け取られる。平易な言葉、数行の短い詩、それは重吉の〈詩〉に対しての意識が薄かったということでは決してない。むしろその逆である。

詩壇において、三木露風や福士幸次郎、萩原朔太郎等が詩論を展開していた頃、重吉もまた、詩壇に関心を持ちながら、自分なりの〈詩〉というものをとらえようとしていた。そしてそれを散文だけでなく、詩で表現しようとしている。

わがごとく詩をかくものはない、
私は、独りだ、
私は、幼い、

しかし、

私のように、端的なものがあらうか、
私のように
詩を、恋ふるものが、あらうか

（詩稿「焼夷」より）

ここで井上洋治氏の一文を見る。

何かについて知ることと何かを知ることとはちがう。何かについて知るという知識は、概念を媒介としての知識であって、他人にコミニュケーションすることが容易である。いわゆる学問的知識はこの知識に属する。これに対して、何かを知るという知識は、いわゆる出会いによる体験的認識であり知識であって、これはいわば直感的に内側に飛び込んでものの真相をとらえる知り方であって、これは他人にコミニュケーションすることが極めて困難であるという欠点を持っているが、前者より更に深くものの真相にふれているということができると思う。

（「日本の福音宣教について」[注2]）

詩というものも、《体験的認識》がなければ理解し得ないのではないか。重吉は言葉以前にある詩を感じていた。しかしその詩を表現するのは言葉である。単なる言葉の羅列か、そこに詩を感じることができるか否か、ということは究極では説明できないことではないだろうか。重吉は次のような詩と一文を残している。

詩はなにゆえにとほといか
なにものもうばうことのできぬせかいであるゆえ、
かなしい日はかなしみのみちをゆきくらし
よろこびの日はよろこびのみちをゆきくらし
たんねんにいちねんにあゆんできたゆえ
かすかなまことがみえてきた、
じぶんでみつけねばたれも力をかしてくれぬ
このひとすぢのたびはつらかったが
こわたれぬせかいがすこしみえてきたかたじけなさ、
わたしを殺さねばこのせかいはうばへぬ、
わたしのように苦しみ
わたしのようにめぐまれてあらねばこのせかいはみえぬ
いつの日からんらんとみえてくるだらう
いつかはっきりとうたをみることができるだらう

（「ものおちついた冬のまち」より）

詩のかほり――これこそ詩の究極である。

（「ジョン・キーツ覚書其の他」より）

《詩のかほり》をどんなに説明されたとしても、結局は嗅いだ者にしかわからないのであろう。重吉には詩の《せかい》がみえてきていた。他の詩人のような詩論を残さなかったのは、理論的な構成力の乏しさというより、詩的なものから離れられなかったということが強いのではないか。《詩のかほり》を理論的に、言葉を尽くし

て説明したとしても、≪詩のかほり≫そのものを完全に表現することはできないだろう。それは詩によってしかあらわすことのできないものである。重吉は書いている。

本を研究することによって
ひとつのせかいへゆきついたひとは
本を研究することについてしかことばをもたない
詩をつくりながらゆきついたひとは
詩をつくることにしかことばをしらない
（「ものおちついた冬のまち」より）

この詩で重吉が語っていることを全く肯定するわけではない。しかし、詩のことばと研究のことばは確かに違う。重吉は詩によってしか表現できないものの存在を見ていたのである。

二

田中清光氏は、重吉が日本近代詩の流れの中で、歴史的な位置を与えられなかった理由として、≪キリスト者による詩であるということ≫を指摘している。[注3]

重吉の詩が、キリスト教信仰詩と見られることで、正統な評価を受けられないということはどうしてもあるだろう。そこには日本という風土の問題、日本人という問題がある。

内村鑑三の説いたキリスト教に感銘を受け、一度はキリスト教に入ったと思われる文学者達が、後にそこから抜け出てしまったように、日本という風土にはキリスト教を拒絶するようなものがある。井上洋治氏は次のように言う。

キリスト教の信仰そのものが単なる書斎の中の思想や生活の教養としてのアクセサリーではなく、全人格的な実存的行為であり、全生活であることを要求する以上、日本人は自己固有の実在感覚、更には心理構造を失う自己崩壊の危機を西欧キリスト教の受容にあたって感じとったのであろう。
（「キリスト教の日本化」[注4]）

だが、重吉は日本的なものを失うことなく≪全人格的な実存的行為であり、全生活であることを要求する≫キリスト教を受容していった。そしてまた、信仰とともに、芸術である詩をも携えていった。これは藤原定氏が指摘する如く、≪詩精神と宗教との間には共同の源泉がある≫≪詩は宗教になりうる≫ということが重吉の中でおこったからであろう。[注5]

詩の信仰と生きること、これらはすべて、重吉にとって一つのことであった。

うたもひとつの行ひである
キリストはおしへていった
よきおこなひはかくれてなせと
わたしのうたがほんとうにねうちあるなら
かくしておいてもこころがいらだたぬはず

（「ものおちついた冬のまち」より）

どうしたらよいうたがつくれようか
空がいつもいつもみづからを更めてゆくように
あなたみづからも刻々に洗ひかへられてゆきなさい
くもをまるきりないものにしようとするなら
どんよりといちめんにくもってきます

（「ものおちついた冬のまち」より）

重吉にとって、信仰をもって生活し、自らを信仰者として深め、清めてゆくことが、詩を磨いてゆくことと重なるのである。信仰だけでなく詩作をも《全人格的な実存的行為》（井上洋治氏）としていたのである。この事は他の詩にも顕著に現われている。

なにもかもかんがへないで
ただひとすぢによく生きてごらん
それがうたです

（「ものおちついた冬のまち」より）

だが、単純にこれらのものが一つに統べられているわけではない。重吉は詩と信仰が二つのものとして重吉という存在を引き裂こうとする時期も過ごしている。詩というものに意識的だっただけに、詩によって《名》をたてること、詩集を出すこと、詩を発表すること等の欲望はつきまとわざるを得なかった。そして、いわゆる詩人として詩壇で活躍することは重吉の信仰の道からは外れることであった。重吉にとって詩壇は、《いがみ合ひばかりする詩人》（「寂寥三昧」より）という風に映っており、《ほんとうの詩人はゐない》と思わせるのである。

詩と信仰と、この二つの間（はざま）に立つことによって、重吉はその独自の世界をつきつめていかざるを得なかったのである。《わたしが／詩をすてるとき／わたしはほんとのひとになれる》（「桐の疏林」より）と揺れながら進んでいったのである。

三

渋沢孝輔氏が語るように[注6]、重吉は《通りいっぺんの印象と固定観念》で評価された場合、《〈宝石〉のように純粋で透明で、短い詩行のうちにポエジーのエッセンスだけを掬いあげている詩人、だが、脂気が少なすぎてどこか物足りなく、いわば殺菌処理が効きすぎているような詩人》として受け取られる。しかし、重吉を単に純粋なだけの詩人として見ることは、彼をあなどっていることに他ならない。

もちろん、信仰特に隣人愛などの面から見れば、以下は重吉という人間の限界と言われるものだろうが、詩人としての重吉には、この資質がより〈うたう〉ことへと導いているのである。

血あり涙あるひとになるのだ
できなければ死のふとおもふ

（「ねがひ」『しづかな朝』）

いたづらに
つかれてゆく
いたづらにすりへらされてゆく
（「ものおちついた冬のまち」より）

いけにえとなってくらそう
大いなるいけにえの人を仰ぎながら
ひとが投ぐるのろひをむねにかざっていつくしみたい
（「犠（いけにえ）」『しづかな朝』）

これらの詩篇を、単に重吉の信仰の上での願いとだけ見てはならない。裏を返せば、重吉がいかに、人間、他者との関係に苦しんでいたか、また、≪のろひ≫とまで感じるごとく、≪すりへらされてゆく≫と感じるごとく、生きることに否定的であったかということが表現される。

生身の人間である他者、家族以外の隣人を容易に愛し得ぬこと、それは努力によって克服されるような質のものではない。重吉の資質としてどうしようもないものであり、だからこそ内面での、他者や世間への和解の欲求は高まっていかざるを得なかったのだろう。

重吉は次のように書いた。

キリストは虚無とみゆるものへ、彼の不滅の詩を書いた。ラザロを甦らせたのも、マリアの罪をゆるしたのも、みな彼の各々一篇の詩である。彼のペンは彼の全心であった、そして全身であった。彼の原稿紙は「世界」そのものだった。彼の唯一の正しき読者は神であった。彼は自分の作品を神に読んでもらひ、「よし！」とほめられる、ことのみをもって満足した。
（「ジョン・キーツ覚書其の他」より）

しかし、重吉の意識は、他者や世間への働きかけの方向にはいかなかった。重吉は、自分をとりまく自然と、詩作の方に意識を向けていった。そして自分自身を見つめることへと。

だが、重吉の稀有な所は、それでもキリスト教という信仰から抜け出ないということであった。

安西均氏と石原吉郎氏の対談において、安西氏は次のように語る。

八木重吉の詩にも、神さまと格闘しているようなものもありますけれど、どこか花鳥諷詠的なところがあるようで、やっぱり日本人の信仰のパターンとでもいうか、（中略）つまり、流水行雲的な、いかにも日本人的なものでね。
（「裏返して見るキリスト像」[注7]）

安西氏は≪流水行雲的な≫≪日本人の信仰のパターン≫だというが、果たしてそうだろうか。

また、森田進氏は[注8]重吉の≪流れる≫という詩語に着目し、≪流れる≫発想はどうしても罪意識をすりぬけていってしまう≫、≪こういう一元的世界へと収斂されていく構想力からは、けして心情の

屈折は起こりえませんし、詩の批評、すなわち詩論（ポエチカ）は生まれるはずはない≫と批判的にとらえている。

重吉の自然をうたう姿勢、≪流れる≫ような感覚は、このようなマイナス面ばかりで構成されているのだろうか。

ただうたわしめよ
ただなかしめよ
われをつくりしものよ
小鳥のごとくわれを生きしめよ、
残すべき名のわづらひも無く
つたなきをかへりみもせず
ひときかざるをうれひもせず、
うたひおわらばそのままに
消えゆくうたを　ひくくとも　ちからを　こめて　うたわしめよ、

（「幼き怒り」より）

もろもろの
幻想がうたではない
まづそれらを
日常生活のいたみと　平凡さであらひされ
すはだかのにくしんとなって
なほかがやいてゐたら　紙をのべよ

（「断章」『幼き歩み』）

このような詩を残した重吉が、安易に≪流水行雲的≫な信仰、詩作へ流れたとは思えない。

一方、井上氏は次[注9]のように言う。≪居住を風に任せるということは、居住を雲の風、天の風に任せるということであり、生きとし生けるものの存在の根底を吹きぬけている聖霊の息吹きに己れの全存在を任せきるということに他ならない。この居住を任せる天の風こそが、実は聖霊の働きによる神の愛の国（支配）の現実だということになるのだろう。≫

そして偶然にも、重吉の「万象」（『信仰詩篇』）を引用している。≪流水行雲≫、≪流れる≫、≪天の風に任せる≫、言葉は違うが、重吉から感じられるものは同じようである。ただ、それをどう受け取るかだ。

≪己れの全存在を任せきる≫ことが、キリスト者の在り方であるならば、重吉こそこの在り方へと自分を押し進めていった詩人なのではないだろうか。しかも、確かに日本的自然を通してであるが、日本人の受け入れ難い、唯一神の神へである。これは≪日本人の信仰のパターン≫という言い方では済まされないものではないだろうか。

そして、重吉の≪罪意識≫、≪一元的世界≫への≪収斂≫も、ただ≪流れ≫に任せて浄化していくようなものではない。

私はこうおもひます――人間は、必然に、罪に充ちた者、淋しいもの、苦るしいもの、であると。ただ、これに気付くか否かである。そして、それに気付いた者は、まづ、その罪の感に、

淋しさの感に、苦しさの悩みに、もだえます。それは辛いことです。しかし、そこまで行った者は、もう、全能者の恵みを一歩見たと云へるでせう。

（大正十一年二月二日付島田とみ宛書簡）

肺患者は　死を怖れぬ
むしろ死の苦しみを怖れる
否　死にいたる迄の近親者への済まない心に充たされる
否　児と妻への永い〳〵惜別を怖れる
否　尚心澄む日は
神と人々とに負ふ責務を果さなかった弱さに胸がふさがる

（『ノオトE』より）

人を殺すような詩はないか

（「詩神へ」『ノオトE』）

手紙は、まだ本格的には詩作を始めていない初期のもの、詩は晩年の病床で書いたものである。ここには《罪意識》、《責務を果さなかった弱さ》の自覚とともに、死の際にきてもなお、詩を求める姿が認められる。それは重吉の一生をつらぬいている変わりのないものである。重吉はこのような面で〈認識した者〉であったのではないか。

日本人にとって、キリスト教を生活とすることは容易ではない。詩は生活である。そして重吉にとっては、詩を生み出すこと、求めることが信仰を深めることでもあった。この《一元的世界》は重吉個有のものであり、打ちたて難いものであろう。

神は愛である
生活は詩である
愛は神ではない
詩は生活ではない
しかも愛は神でありたい
詩は生活でありたい

（「生活と詩」『赤い花』）

四

この稿の冒頭で、詩についての詩を書くことが《求道的詩人》の証しである、と述べた。

このことは、信仰と詩がひとつの道となっていったことを考えれば、証しと言えるだろう。

もう一つ、〈うた〉という問題を保留してあるのでそれについて考察したい。

田中清光氏は重吉の詩について、《まぎれもない日本語の詩として在る》と書く。《日本語の詩として在る》ということ、これは〈ことば〉の問題である。この要素として、重吉の〈ことば〉の用い方とともに、詩の中に〈うたう〉ということを含ませていたからではないだろうか。[注10]

森田進氏も〈うた〉ということに着目し、[注11] 重吉の生涯には《明

らかにこの〈うたう〉姿勢が底流している》《幻想の故郷への回帰とは深く連っている》と指摘している。

現代詩においてはあまり見られなくなった、この〈うた〉である詩。しかし本来、〈詩〉とは〈うた〉うものではなかったか。重吉は〈詩〉を〈うた〉うと書く。それは、言葉を詩のことばとするために、また、うたうような心になる時が詩を感じる時であったがために、書きつけたものではなかったか。

雨をみてると
おどりたくなる
花をかついでうたをうたわう

（「雨」『花をかついでうたをうたわう』）

月に照らされると
うたを歌ひたくなる
月のひかりにうたれて
花びらがこぼれてゆくようなうたがわく

（「月」『花をかついでうたをうたわう』）

ふるさとは瞳をひらき
わが胸に　幼かりし日のゆめをなげてかへし
酔へといふ　うたへといふ　酔へといふ

（「ふるさと」『よい日』）

これら三篇が、それぞれの〈うた〉を持っていることは、発声し、音数律構成をみればより理解できるだろう。

「雨」は、すべて三・四音を基調とした、七音のフレーズ四つで構成されている。

「月」は、三・六音、三・七音、三・八音と、破調ではあるが、三・七調になっており、最終行で、はなびらが・こぼれてゆくような・うたがわく、と区切りにくく、流れる言葉を使っている。

「ふるさと」は、一行目、二行目が、初め五音でそろえられ、三行目がリフレインとなっている。

これらは定型詩ではない。しかし日本語の持つ調子が生かされ、〈うた〉となっている。

詩を〈し〉でなく〈うた〉とする。これは重吉が言葉のみにこだわって、調子をそろえようとして成ったものではない。《おどりたくなる》心、《月のひかりに》うたれ、また《幼かりし日のゆめ》を思い出し、ふるえる心、躍動する心をことばで現わそうとした時、その心にのったリズムが生まれる。それを重吉は真っすぐに見つめ、書き写したのである。

純であれ。然し、リズム、メロディを失ふな。美しかれ、しかし力あれ。リズム、メロディなき「純」はあり得ぬ。真の「力」なき「美」はない。

日本語のもつ“inner soul”（「内霊」）を感知しなければならない。さうせねばやはり永遠性は生じ得ぬ。

（「ジョン・キーツ覚書其の他」より）

そして、この重吉詩のリズムは、日本語の〈ことば〉について鋭敏な感覚を持っていたからこそ生まれたのである。

重吉は〈うたう〉ことを意識して〈詩〉を書いた。そして〈うた〉の方へ流れてしまうこともしなかった。いわゆる〈うた〉は無名性を持っている。誰からもうたわれる〈うた〉には作者の影は薄い。一般的なのである。

しかし重吉は決して自分を手渡さない。重吉は自分の〈うた〉をうたおうとする。〈私〉が意識されるものは〈詩〉であろう。

重吉は〈詩〉と〈童謡〉とを、自分の中ではっきりと区別している。

《鞠とぶりきの独楽》の「憶え書」においても、《これ等は童謡ではない。むねふるへる日の全をもてうたへる大人の詩である。》と書き、詩句にも《若いうちに童謡をつくるな》（「寂寥三味」より）というものがある。あくまで重吉は、この時点では〈詩〉において〈うた〉おうとするのである。

そして〈うた〉う力が強く働く時は、日本的自然、雄大なものではなく日本人の特有の感性に触れやすい小自然、花、森、雨、草等に感じ入る時や、ふるさと、幼い日々への郷愁を感じる時が多いようだ。だが、自然に囲まれながらも、決してそこに溶け込んではしまわない。必ず重吉の眼が感じられる。

このようなモチーフの面からも、重吉が《日本語の詩》をうたっていると言えるのではないだろうか。

そして〈うた〉と〈し〉とが重吉の中で交錯している、そこに近代詩と現代詩の要素の境界があるのではないだろうか。

詩史的に見れば、重吉の詩はなんら実験的なこと、新しいことを目指さない、退行した詩のようにも見える。しかし、定型から逃れ、なおかつ詩であらしめるための調子を創り上げようとした詩壇の動きを考える時、重吉の詩こそ、日本語の持つ調べを生かし、定型にはまることなく、〈うた〉い得た〈詩〉なのではないだろうか。

萬葉の調律も必要でない
芭蕉の調律も必要でない
私自らに必要なものだけが尊い
私はどんな風にうたってもかまわない
ただ私の道は一つの外に無い

（「詩」『鬼』）

萬葉には萬葉の調律が正しかった
芭蕉には芭蕉の調律が正しかった
これから先き
真の詩人は自分自らの調律にのみよるこそ正しい
問題は調律を生かす圧力である

（「調律」『鬼』）

五

《この人の詩には、行の終りの文字のあとに、余韻などという小さなものではなく、もっと深い想いが、はてしなく展開する。》[注12]と

舟越保武氏は言う。氏の感じている≪深い想い≫というものは、やはり重吉の詩語、その〈ことば〉から、重吉の詩に対する、信仰に対する、そして生き方の姿勢が、にじみ出ているからであろう。

重吉の詩はほとんどが短詩である。そしてそれは重吉が選んだ詩型なのである。

ほんとうに
かんげきがさえてくれれば
みじかいことばにもられてくる

（「ものおちついた冬のまち」より）

そして、重吉の詩は田中清光氏が、≪表出自体が刈り込まれつつ、ますます厖大な世界を指さすという成り立ちとなったのである。≫[注13]と言うように、一種、俳句的なかたちの詩となっているのである。

俳句は十七文字という限られた言葉によって、広い世界、深い感情、無限の感覚まで表現し得る。言葉では言い現わせないもの、それを言葉によって表現するのである。

そして重吉の詩も、言葉では現わせないものをも表現している。

しかし、言葉少なというのは≪貧しさ≫とも受け取られる。藤原定氏は≪重吉の貧しげに見える想像力は、軽快に空高く飛び去らない代りに、いつでも彼自身の実存に深く関わっている。≫[注14]と言う。

重吉の想像力の乏しさは、時折指摘されるものである。確かに重吉は、実在しない物や世界を想像し、こと細かに説明したりはしない。そのような種類の想像力は確かに乏しかったように思う。だが重吉の心は、現実のみにひきずられているわけではない。重吉の心は≪軽快に空高く飛び去≫ることができるのである。そして重吉の想像力とは、体感、実在感をともなうものであったように思う。

肉躰までにひとつの詩がひびきわたり、ひとつの木にひとつの
葉がもえいづるこころがわかったなら
うたうまいとしても詩はひとりでにうまれてきます、

（「寂寥三昧」より）

うたうときは
太い感情のなみに
わたしのすべてが
えんえんともえながらはしりたい
よろこびのときは
桃のひとつのはなが
ひとつのはなのみになりきってさくように
かなしみのときは
柿のいろづいた葉がおちてゆく
そのみちみちたしづけさを
わたしのしづけさとしてうたひたい

（「欠題詩群（二）」より）

おそらく、重吉は体全体でうたおうとしていたに違いない。≪肉躰≫を意識し、≪わたしのすべて≫を意識する重吉は、単に比喩として

でなく、木や葉や花になりきったかのような状態でうたったのである。現実ではない世界を思い描くのも想像力ならば、自分以外のものに成り切るというのも想像力であろう。重吉は、このような想像力を持っていたからこそ、草や花などをうたい、一見貧しげに見えても、詩の空間は広い世界をのべているのである。

詩の極致は、ことばを、解脱するところにあるらしい、少くも、詩は、まづ、「表はされてゐないかほり」が表はされてをらねばならぬ、

（「断片」より）

わたしは
森のような詩がつくりたい
すくすくと木のようにならんでゐて
祭のように人をすひよせるものをなかにもってゐたい

（「詩」『晩秋』）

重吉は全人格をかけて詩作し、なおかつ、〈ことば〉というものに何を盛ることができるかを感じとっていた。もちろん《森》に対して《祭》に感じるような《人をすひよせるもの》を感じないのならば、重吉の詩は表現力の乏しいものと映るであろう。しかし、日本という風土の中で生きてきた日本人の感性で感じるならば、重吉がどのようなものを求めていたかが理解できるであろう。

重吉は自分なりに詩をとらえ、その詩を目指して詩作していった。そして、その重吉詩は、近代詩の中において、独得な光を放ち得ているように思う。

注1（佐藤泰正『日本近代詩とキリスト教』新教出版社一九六八・十一・三十）
注2（井上洋治『イエスのまなざし』日本基督教団出版局一九八一・九・十九）
注3（田中清光『詩人八木重吉』麥書房一九六九・十・二十）
注4（注2に同じ）
注5（藤原定『詩の宇宙』皆美社昭和四十七・九・二十）
注6（『八木重吉全集』月報2『「実在」への激しい希求』）
注7（『近代日本キリスト教文学全集詩集』月報X
注8（『日本現代文学とキリスト教』「八木重吉の詩の世界」桜楓社昭和四十九・十・十）
注9（注2に同じ）
注10（注3に同じ）
注11（注8に同じ）
注12（『八木重吉全集』月報3「ひとりごと」）
注13（注3に同じ）
注14（注5に同じ）